

第四部

座談会

全電通労働運動と大阪中電の時代

前田裕晤（前全労協副議長・元全電通大阪中電支部執行委員）

芹生琢也（元全電通近畿地本書記）

福富健（元全電通北大阪支部書記）

新開純也（関西ブント政治局＝当時）

司会・江藤正修（元『労働情報』事務局）

□「四・一七スト」が一つの転機となつた

江藤 それぞれの方の前田さんとの関わり、全電通労働運動との関わりについてお話をください。

芹生 まず、私の全電通労働運動との関わりから振り返つてみます。私は、一九六四年一〇月、全電通近畿地本の書記になりました。前田さんから、地本が書記を採用する予定だ、試験を受けてみよ、との連絡があつた。さつそく大阪市大から私、同志社大から福富、大塚、藤野君が受けて、全員が採用された。

この書記大量採用には次ののような事情があつた。この年の春闘で公労協が「四・一七スト」を構えたことに対し、共産党が「四・八声明」を出して反対の立場をとつたことで、各組合では大混乱が起つた。全電通では、こうした共産党の行為は「スト破り」だということで、これに加担した役員や書記を一斉に除名処分とした。その結果、書記局体制にアキができた。その穴埋めに私たちが採用されたわけです。それまでの書記採用は縁故採用が通例で、公募は画期的なことだつたんで

す。

採用が決まつたあと、私と大塚君が地本、福富君が北大阪支部、藤野君が大阪地方支部（大阪市を除く府下のすべての電報・電話局がエリア）に配属されました。当時の近畿地本は委員長が片山甚市（片甚）、書記長が山岸章だつた。

かねて前田さんは、地本には公安が出入りしているから気をつけろと言われていました。案の定、一週間ほどすると公安がやつて来たんです。私は聞いていたので驚かなかつたけれど、相手は私の顔を見るなりびっくり仰天した様子だつた。あとで聞いたところによると、公安は「片甚さん、芹生はウチで面倒を見た男や。あれは止めときなはれ」と忠告したらしい。けれど片甚は「それは見所がある、使いこなしてみせる」と言つて帰した。いかにも片甚らしい。

しばらく地本で仕事をしていたが、片甚から、これから何をやりたいかと聞かれたので、大塚君は支部でやりたいと言つて、すでに藤野君が配属されている大阪地方支部に行つた。私は「大阪総評のオルグをやりたい」と答えた。大阪総評は片甚が副議長で、オルグ団は左派で固まつていたが、その連中は、片甚がお目付として私を派遣してくるととつたらしく、猛反対した。結局、名前だけは残して、実際には全電通近畿地本で活動をつづけることになつた。

福富 北大阪支部は「四・一七スト」当時、全電通における共産党の全国最大拠点であつた天満支部が再編された支部です。そのキャップが同支部の草川委員長といわれていた。それを「四・一七スト破り」として片甚・民同は根こそぎ組合員除名処分とした。その意味で草川は片甚同様、伝説

上の人物の一人と言える。私はその北大阪支部に配属されたわけだ。

□大阪中電の職場闘争の実相にふれて

芹生 かねて私は「労研」のことは聞いていましたから、そこで活動できることを楽しみにしていました。けれど、なかなか召集されない。どうしたものかと思つていたところ、ようやく召集されて行つてみると、会議そのものよりそこで交わされる雑談が非常におもしろかった。そこには、古布（充）さん、木村（保博）さん、伊藤（修身）さん、女性の原（ゆたか）さんとか、いろんな人たちがいた。たしか前田さんの家だったかな。雑談の中で語られるのは大阪中電の職場闘争の実相です。毎日職場でどんなことが起こっているか、リアルに分かつた。これをどう位置づけたらいいのか、それを論理化することで私たちの労働運動論が築けるのではないかと思った。

ブントとしての組織化が急速に進んだのは、中電より大阪地方支部です。あそこは大阪市以外の府下全域の職場を網羅した支部で、地域的にも広範囲で運動的に空白のところが多かつたから、そこを藤野君と大塚君がきちんと組織していった。青年部長に鈴木忠夫君がいて、彼をオルグして完全に青年部を掌握してから支部全体に広がつていったわけ。その後、北大阪の福富君たちとともに膨大な数の反戦青年委員会を作り上げていったんです。

前田 北大阪は伝統的に共産党の地盤だったところや。そこに草川という男がいて臨時工を本工にしていく闘争をやつた。彼は党北地区委員であり、産別フラクの責任者も兼ねていたが、現実の闘

いには党官僚としてではなく現場に密着していた。片甚とはそのへんではウマが合うというか、党の中でも共闘する議論をしている様子にはみえなかつたな。かなり独断的にやつていたと思う。草川は臨時工の本工化闘争を片甚と組んで展開し、本採用に決まるたびに勝利した局所で勝利集会、いわゆる「万歳」集会をやつて気勢を上げた。そんなとき、草川と片甚が泣いて肩を組んでいたといふ。だから、四・一七で草川たちの除名が決まる時、前日に二人で語り明かしたという。そんなウワサがあつたな。

福富 ありうる。

江藤 当時、他の分野でも臨時職員（臨職）闘争があつたんですね。全通では宝樹がI.L.O.なども使って、臨雇を本採用にする闘争を指導していた。そして成果をあげていたわけで、これがその後の宝樹派の基盤になつた。

□片甚と山岸の面接試験

江藤 ところで、福富さんの全電通との関わりはどうだったのでしよう。

福富 ぼくは一九六〇年、同志社大学に入学して安保闘争に参加、法学部、学友会、京都府学連の三役などを経験した。また田所事件（六三年・第一部第三章参照）調査委員長をやり、芹生君と同時に専従書記になつた。その際、印象深かつたのが片甚と山岸章による面接。一人とも楽しんでいるような感じで、根掘り葉掘り、思想調査のごとく延々とやられた。

芹生 ハーえ、そりや大変だった。私も同じ片甚と山岸だつたけれど、「君はガリ（謄写版のガリ切り）、何年やつてた？」みたいな質問だけであつさりだつた（笑）。

福富 ぼくは一時間ぐらいやられたかな。「逮捕されたことあるか」とか。実は六二年の政暴法闘争の時、府学連三役として逮捕歴があつた。それ以外にも「愛読書をあげてみて」「尊敬する人は」「読んでいる新聞は」といった調子で、細かいことをいつぱい聞かれた。でも、結果的に試験は無事通過し、北大阪支部に配属された。

共産党なき後の支部執行部は、いかにも急ごしらえの感は免れなかつた。当然ながら社会党・民同が多数で、共産党を離れたメンバー（構改派）もいた。書記は四人で、共産党時代を知つている書記に滝本（インター、教宣）がいた。女性では藤本（総務）、奈良出身の女性（会計）、私は組織部担当となつた。関係する執行委員は組織部長、青年常任委員長、婦人部長。一年目は「座標」（パンフレット）というグループを作り、青年層をオルグして回つた。

二年目は調交部担当で、天満地区、堂島地区との団体交渉参加と議事録・調査資料作成に追われた。その過程で北電話、梅ヶ枝電話、吹田電話、城東電話、此ノ花電話、御堂電話などの青年活動家を中心し、反戦青年委員会活動や春闘の学習会活動で少しずつ影響力を広げていつた。組合員三千余名の北大阪支部が、私にとって徐々に身近な存在となつてきた。

そんな中で忘れられないことは、私が六六年全電通全国大会（銚子）・地方大会、六七年全国大会（金沢）・地方大会と二年連続で大会代議員に選ばれたことだ。書記の身分での代議員選出は前

例のないことであり、その結果、一人の専従執行委員が落選する事態が二年連続して起きたのである。銚子大会ではなんとか発言しようと私は举手を続け、ようやく指名されて反戦青年委員会活動の重要性を訴えることができたのだった。

もう一つ記憶に残つているのは成田（三里塚）空港反対同盟委員長・戸村一作の来賓挨拶。田中正造を師と仰ぐクリスチャンの彼は、「天皇の御料地を潰して空港にするとは何ごとか」と糾弾。

戸村さんも中々の役者。会場では驚きと共に喝采を浴びた。全電通での三里塚闘争の幕開けである。翌年の金沢大会では代議員に当選しながらも、近畿地本の関係者に周囲をガードされて発言はかなわなかつた。そのうち、中央本部副委員長に就任した片山甚市から私に電話があり、「近畿地本へ來い。理由は北大阪支部執行委員会からの要望だ」の一言。一九六八年、六九年は近畿地本の組織部担当となつた。全電通の青年運動は大阪において反戦派が主導権を握り、近畿地本青年部長（鈴木忠、ブント系）も反戦派となつた。

地本組織部での任務を直接に指示したのはまたも片山甚市。「大阪地評青年部に行け」である。毎年八月が地評青年部の大会で、一九六七年度の大坂地評青年部長は全電通近畿地本青年部長の浅野（京都支部出身）。一九六八年度の人事案を執行部提案したのは、部長・町田（大阪市職、反戦派、後の自治労副委員長）、副部長・藤垣（全金、日共系）、高岡（合化、協会派）、書記長・福富（全電通・反戦派）だった。この中で書記長案は、福富か藤垣かで対立、決着がつかないまま大会は延期となつた。結局、六九春闘に間にあわすため副部長・福富、書記長・藤垣で決着。だが青年部にお

ける反戦派の主導権は変わらなかつた。

その後、この時期の全大阪反戦青年委員会の体制は社青同、大阪地評青年部を軸に西村（祐絵・社青同）、町田（有三・大阪市職）、福富（健・全電通近畿）、鍵山（勲男・社青同）となつた。

一九六九年春闘は国労青年部早朝決起集会を皮切りに各単産、単組の集会への地評青年部からのアピールの機会を持つた。

全大阪反戦青年委員会として関西学院大学新聞会主催のパネルディスカッション「反戦闘争をいかに進めるか」への参加（原水禁・池山重郎、評論家・鶴見良行、全大阪反戦・福富健）。さらに八・六原水禁大会における「全国青年労働者学生総決起集会」は、司会に青年労働者（福富・ブント）、学生（法政・中核派）を選び活発な討論。これらの組織化が「大阪中電マッセンストライキ」へ向けた宣伝活動と「中電スト実」、「関西地区反戦連絡会議」、統一戦線としての「全関西ストライキ実行委員会」の形成過程である。

□三世代にわたる関西ブント

江藤 こうした関西における労働運動の展開とブントの関係はどうなつていてなんですか。とくに関西ブントって何なのか。関東の人間にはちょっとわかりにくいところがある。その辺も含めて、新開さん、どうですか。

新開 共産主義者同盟いわゆる第一次ブントが結成されたのは一九五八年ですね。ぼくが京大に入

学したのが五九年です。ぼくらより三・四年上の世代がブント結成に関わつた。ブントは世代的には三つに分かれるんだけれども、第一世代はこの結成に直接関与した人々、京大では今泉さん、北小路敏さん、佐野さんだつたり、同志社であれば佐藤浩一さん、大阪市大であれば柳田さん、武田さんたちの世代ですよ。東京であれば清水丈夫、唐牛健太郎（北大）、姫岡玲一などがいて、その上には島成郎さん、森田実さんがいる。

第二世代がぼくらなんです。ここにいる福富、芹生たちです。五八年から六〇年入学あたり。六〇年安保を一兵卒で闘つた世代、この世代から共産党体験がない、ブント純粹培養世代、ブント直行世代です。

第三世代は、ぼくらより数年下の世代で塙見孝也や田宮高磨たちの赤軍世代です。塙見はぼくの弟子筋にあたるし、田宮は芹生の弟子筋と言える。かれらは一九六九年、ごそつと赤軍結成へと流れれる。赤軍世代はこの関西中心メンバーだった。

こうしてブントは三・四年おきに世代的、思想的変遷があつたということです。かねて六〇年安保が終わつてブントの内部抗争が始まる。結果、組織はガタガタになつていくわけですが、そのとき第一世代の大部分が東京を中心に革共同へ流れた。すると、ブント中央が無くなつてしまつという事態になる。それまではぼくら第二世代を中心、「ブント関西地方委員会」を名乗つてきたけれど、ブント中央が無くなつたのに「地方委員会」は矛盾だ。そこでやむなく旗揚げしようかということになつた。つまり成り行きで自称・他称「関西ブント」ということになつたんですよ。これは

第二世代が中心で、京大だけで五〇人ぐらいいたし、同志社では田原や福富の世代、市大は芹生や旭が中心にいてそれなりの勢力となつて関西の学生運動を主導していたんです。

□労働戦線への展開

新開 労働戦線はどうだったか。六〇年安保の過程で前田さんたちとつながりができて、さらに第一世代で就職した人たちがいたから、労働運動に手がかりがあつた、ということです。べつに運動があつたわけではない、グループがあつたということですね。

第二世代は六〇年代半ばにかけて卒業していくわけだけど、就職するという者と職業革命家（職革）となつた者と、芹生や福富のように労働運動に飛び込んで行つた者といろいろに別れたわけです。ぼくですか？　ぼくは次世代養成のため学生運動指導に残つた。

一方、東京の第一世代の中にも大阪に流れてきた人の中には広告業界、たとえば大手広告代理店の電通で労組に入つたりする者も出てきて、それなりに労働戦線といえるものができるてきた。でも、ぼくの記憶では、大阪中電はともかく、六四年から三・四年はそんなに目立つた動きはなかつたな。やはり、ベトナム反戦運動がひろがり、全共闘運動が起きてくるあたりから、反戦青年委員会ができて、就職組も活性化していった。その過程で労働者部隊といえるものになつていつたと思う。

江藤 藤野さんや福富さんの北大阪や大阪地方支部での反戦青年委員会の活動、その広がりは劇的でしたね。

福富 この時期の一九六八年の日大全共闘、東大全共闘を頂点とした学生の反乱は以前とは異なるものだつた。単なる要求・物取り闘争ではなくて、制度の根底を問うラディカルズム、制度と価値観の解体を伴うものであり、くしくもヨーロッパ、アメリカ合衆国を中心とした学生の反乱と同質のものであつた。世界では同時に、ベトナム反戦闘争が一層の広がりを見せていた。

国内でも青年労働者や市民が動き始めた。労働組合運動ではなく、一人ひとりの個人が決断して立ち上がつたのです。

関西でも京都青年行動委員会という小さなグループが四条河原町に登場した。自立した個人の集まりである。ペ平連もまたこの時代を象徴する優れた市民運動の一つである。誰もが「自分にできることは何か」を考え始めていた。

大阪ではベトナム人民支援戦線と名乗つた運動が、梅田新道（梅新・大阪北の繁華街）の交差点に登場した。全電通、マスコミ、国鉄、全通、大阪マツダ、建築事務所、広告労協、大阪大学、阪大病院などの労働者が、反戦を旗印に個人の意志で思い思いに梅新に集まつた。連日絶えることのない自主グループの運動でした。

一方、映画制作会社の毎日放送映画労組（毎放映）があつた。共産党系の組合である。当時マスコミに対する思想統制、組合弾圧が強化されていて、毎放映も長い間、解雇撤回闘争を闘つていた。組合員はビルのスタジオを泊まり込みで占拠、組合ビラ『こんな話』が毎日配布されていた。われわれも「毎放映を守る会」というビラをまき、組合はわれわれの支援を受け入れてくれた。他にも

大阪マツダの闘争などがあり、反戦の絆が地域争議団の様相を呈してきた。これらの活動の一つひとつが北大阪反戦青年委員会の母体となり、関西の地区反戦の第一号が誕生したのです。

その後、関西各地に地区反戦の組織化が進み、関西地区反戦連絡会議の結成へとつながった。ブントの地区党第一号として北地区委員会も組織され、これが中電マッセンストライキの推進軸となります。

□反戦青年委員会広がりの構造

芹生 成功の秘訣はなんと言つても、福富君や藤野君や大塚君たちが自由闇達に動き回ることができきた、ということですよ。配置された支部の民同が脆弱だった。それで自由に動き回ることができた。その結果として高揚期には数百規模のヘルメット部隊ができたんですね。

前田 それと先ほどちょっとふれたパルチザン闘争があつた。それが素地としてあつた。その素地上に反戦青年委員会が盛り上がり上がつていった。片甚の発想は独特で、市外電話の女性組合員を動員して、伊丹の自衛隊駐屯地に「私たちは自衛隊員のお嫁にはなりません」と大書したプラカードを持つて押しかけデモをしたからね。

芹生 そうそう。ちょっと説明すれば、パルチザン闘争というのは、一九六五年に出た大量処分に対する処分撤回闘争のことをいいます。片甚らが打ち出した方針で、本部からの指令の有無に關係なく、職場レベルで自主的に「反職制」闘争をやるという戦術だった。職制とは□をきかない、一

種の不服従闘争をはじめ、職場の壁や天井などあらゆるところにビラを張り尽くす、その他、管理者に対する嫌がらせ、つるし上げ、いわば何でもありの非常時の闘争形態。これで分会の雰囲気はがらつと変わつた。つまり反戦青年委員会の組織拡大はこうした職場闘争の広がりが支えていたんですね。

前田 姫路や和歌山の局から局へ巡つてデモがやつてくる。天満宮の大鼓借りてそれを叩きながら局巡りをやつたこともある。局長を電柱に縛りつけたり、むちやくちやをやつた例もあつたと思う。これが反戦の素地だった。

江藤 それに似た話は国労高崎地本から聞いたことがある。反マル生闘争のとき、力になつたのは職場の民主化闘争だった、と。同じように全通では、六〇年代に集配臨時雇員の本採用闘争で勝つたとき、集配課なんかは解放区になつた。支配体制が弱体化していた。そこに反戦青年委員会が広がる余地が出てきた。

□労働運動における大阪中電の位置

江藤 話を大阪中電の労働運動における位置・役割という問題に移していきたい。

芹生 大阪中電はいうまでもなく全電通の最大の拠点であるわけですけど、日本の労働運動全体にとっても拠点といえる職場だということです。民同にとっても左翼にとってもそういうなんですね。その要因は何かと考えると、なにより片甚という強い民同の運動があつて、その大枠の中で左翼が自由

に活動できた、高度の政治的自由が確保されたということじゃないか。例えば、組合役員に立候補する際には選挙公報に「支持政党」を明示して堂々と争うんです。片甚は「社会党」って書いた。松葉は支持政党を「共産党」と書いたし、柴田は「革新政党」と書いていた。べつにそれが排除の論理で使われたわけじゃない。党にも組合にもそういう強さがあったということ。

前田 おれはそのときは共産党だつたから「共産党」って書いた。ブントができたときは、もうその欄は無くなつていただけどね（笑）。

芹生 政党と組合の関係は有機的に出来上がつていたし、だからそれらの共闘も堂々としていた。前田 大阪電信共闘というのを社会党と共産党と労研でつくついて、日韓闘争などをすすめいた。

芹生 そういう運動の在り方でも大阪中電は労働運動の拠点だつた。そういう地点に立つて七〇年安保をどう迎えるか、それが基本的なテーマだつたと思う。で、われわれはストライキで迎えようと考えた。その先に「マッセンスト」の戦術が出たわけだ。活動家たちのイメージとして、ドイツ革命における「レー・テ」のイメージを膨らませていたんじゃないか。大衆的決起によつて七〇年安保闘争を仕組もうという目標があつた。

□「マッセンスト」への流れを決めた

前田 それを決めたのが、六九年一月、宝塚の毛沢東思想学院での会合だつた。その方針を電通労

研が提起することにした。そのときは「マッセンスト」という言葉は使われなかつた。一〇・二一
を拠点ストライキで、ということだつたと思う。言葉として出てくるのは七・六（さらざき徳二ブン
ト議長襲撃事件）以降だつたのではないか。拠点ストの規模としては、大阪中電のほか国労と都労
連の三つが決起する必要がある、これこそが新左翼の全体の統一方針だということになつた。聞い
ていた大塚有章（毛沢東思想学院院長）が泣いて喜んでいた。

このときの会合は、党派の代表者会議みたいになつていて、メンバーとして陶山健一、樋口篤三、
今野求、高田麦、荒川亘などがいた。当然、関西ブントとして位置づけることになつた。それを言
つたのはタケツチヤン（竹内毅）の論文で、その発想の下敷きには藤田若雄の論文があつた。

芹生 その頃、私は電通全国反戦の組織化に専念していたが、七月、京都の全電通大会で何として
も一〇・二一ストの方針を決めさせようとした。赤ヘルが傍聴席を埋める状況の中で大会は開かれ
た。大阪中電や地方支部の三桁のヘル部隊。京都府知事の鰐川（虎三）のあいさつが野次りとばさ
れた。異様な雰囲気だつた。われわれの獲得目標は秋の決戦をストでやることを大会で決めさせる
ことだつた。一日目は混乱のうちに終わつた。二日目をどうするか。というのは、赤ヘル部隊を見
た執行部がこんどは大会防衛隊を配置することが予測されたが、機動隊なら別として、組合員の防
衛隊など簡単に突破でき、そうなると大会は流会になる危険性もある。それは本意でないので動員
はやめよう、ということになつた。

前田 いや、他の事情もあつた。大会に平行して同志社の学生会館に全国の反戦派が集合していた。

石川の梅沢（主体と変革派）、宮城の加藤滋（第4インター）も来ていた。一方中電では当局、管理者側が局内に「入れさせない」と言つてきた。荒木たちがこれに抗議して座り込みを始めた、という情報が入つて、それならみんな「中電支援」に行こうということになつて、翌日は傍聴に行かなかつた。そんな事情もあつた。

□第二世代の喪失感は大きかつた

芹生 秋には決戦を挑まなければならぬ。しかしこのころ、われわれの間では秋にはブントがぶれる、こんな予感があつた。雰囲気として、悲壮感もあつたかな、つぶれてもやむをえない、といつたような感覺。そんな気分になつた背景に、われらの信頼すべき後輩たちの主力が赤軍派に行つたということがある。塩見や田宮たち第三世代がごそつといなくなつた。この喪失感は大きかつたね。

前田 そう。田宮と藤本が市大にこもつてしまつて出てこない。柳田らも説得したけれどだめ。じや、おれがオルグに行くといつたら、「もし彼らが出てきたら自分は大阪市内を逆立ちして歩く」と言うやつもいた。みんな諦めかけていたというわけだな。

でも結局出てきて、田宮は学対に来た。その後のことを考えると、私には田宮の人生を変えたという意識があるから、よど号以後も田宮と会つてゐる。最初は彼らが「北」に行つて一、二年目ぐらいいからかな、かなり突っ込んチエチエ思想や日本の現状について討論を交わした。それからも市

川誠団長、大谷竹山、田中機械の清水書記長、細川鉄工の津嶋委員長と私の五人で訪朝の時も、田宮や他のメンバーにも会つた。市川さんが彼等にお土産として梅干の樽を持参していたのには驚いたね。

もう一つエピソードを紹介すると、あるとき、塩見が「相談がある」と言つて近所の喫茶店まで来たことがあつた。「おれたちはこれから非合法もやる」と、大きな声で言うわけだ（笑）。そのあげく「前田さん、非合法はどうしてやる？」と、またまた大きな声で言うから、「そんな声で怒鳴つて非合法なんてあるか、普通はラジオの音を大きくして聞こえないようにして大事なことを話す」と言つたけれど、あいつはきよとんとしていた（笑）。

□「マッセンスト」の評価をめぐつて

江藤 さて次に、「マッセン」そのものの評価について、話を聞きたいのですが。

芹生 現象だけ見れば、「マッセン」といつても実態は四人の労働者が決起しただけじゃないかといふ見方があるかもしれません。しかしそれが中電の労働者と労働組合にどれほどのインパクトを与えたか、大衆はどう受け止めたか、労働組合はどう対応したか、各方面でどんな波及が起つたか、全体像が示されなければ、運動としての総括にはならないと思う。多くの労働者が四人の決起を「問題提起」と受け止め、大阪電信支部としても一〇・二ーストを決行するにいたる。労働組合の枠を超えた行動だから、支部として容認できないのは当然のことだが、松葉（誠一郎・全電通大

阪電信支部支部長＝（当時）たちによる支部声明も、いま読み返してみるとそれほど悪くはないものですよ。裁判のときの片甚の証言を前田さんから聞いたが、ぼくは感動しました。拠点としての大坂中電の運動の質を見せたと思う。

一方で、結果的には労研は解体を余儀なくされる。姿を変えていくことになる。最終的には電通信労組になつていったわけで。全電通についてみれば、分割民営化の過程の中で姿も質も変わっていく、普通の労組になつていく、そんな過程をたどることになつたのだけれど。これらは「マッセン」とは別の問題として総括されなければならないと思う。

前田 「マッセン」当日の動きとしてみると、佐渡（正昭）が逮捕されたあと、残つた三人（桑畑正信、大前弘志、川村忠孝）が屋上から垂れ幕を流したわけだが、彼らを組合の倉庫に二日間かくまつたのが松葉たちだつたこと、私はあとになつて知つた。これには驚いたんだ。

私は私で九月二六日、党との関係はケリをつけた。たしかに私はブントの方針には賛成ではない。しかし、スト自体は支部として貫徹する、それに変わりはない。どうする気かと、松葉に迫つた。さらに、佐渡たちを守るべきだ、とも迫つた。たまたまそこにいた藤川が「そうや、同じ金の飯くつた仲のやつをほつとけるか」となつた。迫力があつたよ。藤川は全寮協議会を作つた時の議長で松葉と同じ放出寮だつたし、仁義というか侠気の男だからな。松葉は「ちょっと待て、本部と連絡するから」となつた。結果、中電だけがスト突入となつた、ただし、条件が一つ、争議によつて発生する処分に対する補償費用は出さない、ということだつたが。

私が驚いたのはスト参加四五〇人、デモに出たのが二八〇人という規模だ。しかも、「学生はヘルメット被つているのにおれたちは？」と言われる。配達職場に頼んで探してもらうが業者の手元にあつたのは工事用の黄色いヘルメット。それを五〇〇個購入し、電通のマークを貼り付けてなんとか対応した。

芹生 そうそう、そういうことなんですよ。「マッセン」はそういうもの、流動化現象をつくりだしたんだ。たしかに目指したのはべつのものだつた。たんなる騒乱でなしに大衆的決起が外の決起と連帶する「カタチ」をつくろうというものだつた。そうならなかつたけれど、大衆の間に流動化を引き起こした。そこを見ておきたい。

前田 一〇・二一の前日、北大阪制圧部隊は、大阪駅で機動隊に阻止線を張られて動きがとれなかつた。堂島あたりまで進出したけれど、それが限界だつた。中電の状況はいま聞いて初めて分かつた。これで知らないなかつた。すごいではないか。

福富 おれたち外からの制圧部隊は、大阪駅で機動隊に阻止線を張られて動きがとれなかつた。堂島あたりまで進出したけれど、それが限界だつた。中電の状況はいま聞いて初めて分かつた。これまで知らなかつた。すごいではないか。

芹生 だから、「マッセン」というのは、佐渡君たちが「七・九運動」（六九春闘と五・三〇事件双方の処分撤回を当局と全電通に求めた中電青年労働者の自立的運動）をはじめた七月から一〇月に至る期

間全体の大坂中電における労働運動の流動化の事態を指している、と見るべきだろう。最終的に〇・二一ストに至る過程全体を指す、としたい。暴力的な行動や運動のモラルにもとるような逸脱も含めて、意識の流動化による行動が問われていったんだと思う。

前田 その後四人はそれぞれ退職したり、中電を去つていった。次の世代としておれたちが期待していた連中が去つていったのは残念だった。実は彼ら以外にも労研の次の世代である降矢、吉井が退職し、森井英樹が転勤して中電を去つていく。彼らに与えた影響、その心中を思うとやり切れなかつたし、寂しかつた。

□「マッセン」の時代と現在をつなぐ視点

江藤 現在から振り返ると、いわば「神話の時代」になつてしまつた。この時代の教訓と現在をつなぐ視点がいま必要になつていて。聞くところによると、今日の大坂電通合同労組は増えていると云う。結成当初、前田さんは一〇〇人ぐらいはと思っていたら、結果的に三八人しか来なかつた。

前田 当時としては小さいほうだつた。ところが現在六〇人ほどになつていて。

前田 それは現在のNTTの耐えられない職場状態があるからだ。課長補佐みたいな役職の者が入つてくるんだ。病気が理由で外されるとか、いじめに遭う、それと闘うため、所長に抗議するために入つてくる。そんな例がある。そこでは闘うから環境も改善される。だから「一人でも合同労組員がいるところはちがうなあ」と言われるようになつた。

たとえば去年の暮れにこんなことがあつた。これまで年末に社員手帳が配られていたのに、今からは経費節減のために配らない、と言われた。労組員がいるところでは、さっそく抗議だ。「営業に出かけても何にメモするのか」とやる。そんな抗議行動が始まつて、その職場では全員に配ることになつた。要するにNTTになつてから職場環境は酷くなつた。そこには怨嗟の声がある。だから労組のやることはいっぱいあるだろう。

江藤 大阪電通合同労組として「合同」と名乗つたのは?

前田 地域の争議団・大毎広告も組合員にしていつたからだ。今こそ清水慎三の「ゼネラルユニオン」論が検討されるべきだろう。全労協の中には「〇〇県総合労組」みたいなことを発想しているところもあるが、やはりゼネラルユニオンということだらう。

大阪全労協をみても、出発は活動家集団の労組の集まりであつたが、一定の成果を上げ、それなりに認知される段階に来ると、ごく普通の労働者が加入してくる。そうなると単組の枠を超えた一体性が薄くなるし、単組自身の運動課題が優先されることになります。それは必然かもしれないが、それを打ち破ることも常に念頭に置く。単組の枠を超えた一体性。を目的意識的にも追求する姿勢を崩してはいけないと思うのだが。

江藤 清水さんがゼネラルを提起したのは八一年で、当時はだれも真剣に考えなかつた。まだ企業別でいけると思っていたからだけれど、三三年経つてようやく力の限界を知つた時期なんだと思う。

□清水のゼネラルユニオンと社会的ユニオニズム

江藤 清水慎三さんのゼネラルユニオン論については、この本の第三部「労働戦線の再編と民営化の中で」でも触れていますが、ここで改めてゼネラルユニオン論の概略と現在の私の問題意識について簡単に触れます。

清水さんがゼネラルユニオンに言及したのは一九八一年の『労働情報』新年号での提言、「自立個人加盟労組を決意の時」ですから三三年前になります。この時期に一举に強まった労働戦線再編の動きに対し、当時の総評左派の対応は鈍く、「全的統一」を対置すれば六〇年代後半の労戦統一と同様に中途挫折し、結果として総評を防衛することができる」という楽観論が主流を占めています。

これに対し清水さんは、七〇年代後半から顕著になつた資本主義のグローバル化（当時の清水用語では「世界サミット体制」と日本における企業社会の完成を指摘。今回の労働戦線統一の基礎がこのようなものである以上、従来の総評左派的水準では敗北必至という認識から、次善の策としてゼネラルユニオンを提起したのです。清水提言では次のように述べています。

「日本の労働戦線の組織的空白地帯は：中小零細企業労働者群である。だが、労資対峙の場における労働側の戦略的陥没地帯は、組織された大企業労働者の中にある。」「労働側にとつてのこの戦略的陥没地帯は：世界を闊歩する日本資本主義の最強のとりでとなつていて。…とくに民間大企業の場合、長年の内外企業競争に勝ち抜いてきた歴戦の間に、周到に練り上げた分厚い重層型企業社会

の核心となつていて。」「こうした企業社会にドップリつかつた企業別労働組合の全国的横断連合が労戦統一」という名において、日本労働運動の主流」にならうとしていると分析。

次にその対抗策としてのゼネラルユニオンについて、「多元性」をキーワードにしつつ次のように述べます。「私はこの多元的戦線構築の一環として、広大な未組織地帯と民間大企業における戦略的陥没地帯に焦点を定め、『管理社会に対抗する人間的自立』に価値を置きつつ、労働者の自己主張を中心に連帶の輪を広げる『自立個人加盟労組』の創設が必要な時代と考える」と主張しました。

ところが清水提言のゼネラルユニオンは當時、棚上げされたまま「お題目」に終わりました。清水さんは自らの師匠である高野実の発言、「戦術対応ができなければ運動家にはなれない。戦術対応をする中から戦略との結び目を引き出すべきだ」を引用しつつ、「当面の課題に対して戦術的に対応でき、しかもその対応を通じて長期戦略課題とそれを結ぶ環は何かを提起する」。それが個人加盟方式に徹したゼネラルユニオンの形成だとわざわざ強調した挙句のお題目化による棚上げです。

これは清水提言に弱点が含まれていたというより、当時の私も含む左翼の水準が戦術的にも戦略的にも清水提言に対応できなかつたというべきではないか。その上でもし清水提言に「弱点」が孕まれていたとするならば、清水さんが分析する「分厚い重層型企業社会」が想定よりもはるかに堅牢であり、当時の『労働情報』的左派の水準では歯が立たなかつたからだと私は考えています。

それは第二次世界大戦後にアメリカで成立したフォーディズム型資本主義の好循環構造、すなわ

ち大量生産・大量消費経済と中流社会文化（ニューディール型社会）に労働組合がシステムとして組み込まれた結果であり、アメリカのAFL・CIOはその典型でした。ところがグローバリゼーションの破綻はフォーディズム型好循環を破壊しました。ニューディール型社会の申し子であるAFL・CIOは急速に影響力を失い、それに代わってNPOを軸とする社会的ユニオニズムが大きな流れとして登場しつつあるようです。そして二〇一二年に注目されたウォール街占拠闘争（Occupy Wall Street）も同様の文脈の中にあるように私には見えます。

労働組合の破綻という点で日本とアメリカには類似点があるとしても、産業別労働組合を中心の AFL・CIOと企業別労働組合の集合体である日本の連合との間には、同じ土俵で論じられない違いがあります。しかし、その点を考慮したとしても、清水提案のゼネラルユニオンと社会的ユニオニズムには共通点が感じられと思うのですが、皆さんはどうお考えでしょうか。そして、ゼネラルユニオンの再浮上は可能でしょうか。

□「大きな物語」ではなく「小さな物語」が展望を導く

芹生 日本の労働運動を考えるうえで中心的な論点は、従業員一括加盟による企業別組合の問題です。その弱点を、職場闘争を通じて克服しようというのが、清水慎三の執筆になる総評の組織綱領草案だったが、ついに採択されることはなかった。そして職場闘争が衰退していくにつれて、生産点では従業員意識をこにして企業の労働者支配が完成し、活動家は異分子として排除されていく。

企業別組合は異端排除のシステムとして機能するわけです。私は清水慎三の「ゼネラルユニオン」の提起を、総評組織綱領草案の延長として、つまり総評労働運動に受容されなかつた内容を左翼（新左翼に限らない）に対して改めておこなつたものと受け止めています。同様に、六〇年代末から七〇年代はじめにかけて藤田若雄による「誓約者集団」論の提起もあり、新左翼の間で流行つたこともあつたが、労働運動の路線として深められることはなかつた。

労働運動が企業別組合の論理の貫徹としての労働戦線再編・統一に向かう中で、一方では「ユニオン」と名乗る個人加盟の地域労働組合が続々と結成されていった。産別レベルでも、闘わなくなつた既存の労働組合から離れて個人加盟の「ユニオン」が生まれている。私は、労働実態から離れて労働組合の形態や路線を論じても意味がないと思う。問題は、現に生じている労働問題——たとえば非正規雇用の問題——に向き合い格闘する組織、運動であるかどうかだ。既存の労働組合が全く対応しない中で、地域や職場でこうした課題に真剣に取り組むなら、たとえ少数でも、派遣労働や有期契約労働、外国人労働者や研修生の問題について社会的代表性を主張することができる。実際いくつかのユニオンはそうした位置にあると思う。

江藤さんがいうように、状況は「労働情報」的左派では歯が立たないというのはそのとおりなのでしょうが、体制の小さな割れ目をこじ開けるような社会運動（労働組合であれNPOであれ）は各所で出てきています。さしあたりは「大きな物語」ではなく「小さな物語」が展望を導いてくれるのではないかでしょうか。

ち大量生産・大量消費経済と中流社会文化（ニューディール型社会）に労働組合がシステムとして組み込まれた結果であり、アメリカのAFL・CIOはその典型でした。ところがグローバリゼーションの破綻はフォーディズム型好循環を破壊しました。ニューディール型社会の申し子であるAFL・CIOは急速に影響力を失い、それに代わってNPOを軸とする社会的ユニオニズムが大きな流れとして登場しつつあるようです。そして二〇一二年に注目されたウォール街占拠闘争（Occupy Wall Street）も同様の文脈の中にあるように私には見えます。

労働組合の破綻という点で日本とアメリカには類似点があるとしても、産業別労働組合を中心のAFL・CIOと企業別労働組合の集合体である日本の連合との間には、同じ土俵で論じられない違いがあります。しかし、その点を考慮したとしても、清水提案のゼネラルユニオンと社会的ユニオニズムには共通点が感じられと思うのですが、皆さんはどうお考えでしょうか。そして、ゼネラルユニオンの再浮上は可能でしょうか。

□「大きな物語」ではなく「小さな物語」が展望を導く

芹生 日本の労働運動を考えるうえで中心的な論点は、従業員一括加盟による企業別組合の問題です。その弱点を、職場闘争を通じて克服しようというのが、清水慎三の執筆になる総評の組織綱領草案だつたが、ついに採択されることはなかった。そして職場闘争が衰退していくにつれて、生産点では従業員意識をてこにして企業の労働者支配が完成し、活動家は異分子として排除されていく。

企業別組合は異端排除のシステムとして機能するわけです。私は清水慎三の「ゼネラルユニオン」の提起を、総評組織綱領草案の延長として、つまり総評労働運動に受容されなかつた内容を左翼（新左翼に限らない）に対しても改めておこなつたものと受け止めています。同様に、六〇年代末から七〇年代はじめにかけて藤田若雄による「誓約者団体」論の提起もあり、新左翼の間で流行つたこともあつたが、労働運動の路線として深められることはなかつた。

労働運動が企業別組合の論理の貫徹としての労働戦線再編・統一に向かう中で、一方では「ユニオン」と名乗る個人加盟の地域労働組合が続々と結成されていった。産別レベルでも、闘わなくなつた既存の労働組合から離れて個人加盟の「ユニオン」が生まれている。私は、労働実態から離れて労働組合の形態や路線を論じても意味がないと思う。問題は、現に生じている労働問題——たとえば非正規雇用の問題——に向き合い格闘する組織、運動であるかどうかだ。既存の労働組合が全く対応しない中で、地域や職場でこうした課題に真剣に取り組むなら、たとえ少数でも、派遣労働や有期契約労働、外国人労働者や研修生の問題について社会的代表性を主張することができる。実際にいくつかのユニオンはそうした位置にあると思う。

江藤さんがいうように、状況は「労働情報」的左派では歯が立たないというのはそのとおりなのでしょうが、体制の小さな割れ目をこじ開けるような社会運動（労働組合であれNPOであれ）は各所で出てきています。さしあたりは「大きな物語」ではなく「小さな物語」が展望を導いてくれるのではないかでしょうか。

「一〇・二一 中央権力闘争—マッセンストライキ—北大阪制圧」闘争について

福富 健

(1) マッセンストライキに至る経過（前史）

六〇年安保闘争は戦後最大の政治闘争として闘い抜かれた。社会党・総評の戦列、共産党的戦列の中で、急進民主主義闘争の頂点に登場した全学連は闘いの新たな局面を切り開きながらも崩壊せざるを得なかつた。そして同時に、六〇年三井三池の壮絶な闘いは安保闘争と結合することができなかつた。民間における労働運動はその後次々とその戦闘力を合理化反対闘争の中で解体され、労働戦線統一の名の下に右翼的再編攻撃にさらされた。いよいよその戦闘力は官公労に局限され、三公社五現業の民営化攻撃が始まろうとしていたのが、この六〇年代半ばから七〇年代にかけてであつた。

そんな中、四分五裂していた新左翼の諸グループは、六四年八・二集会（大阪・国民会館）に結集した。また六六年には第二次ブントが旗を揚げた。全国的に労働戦線においても、長船社研、電通労研を始め労働、国労が注目された。

とくに大阪におけるブント系の電通での組織化と反戦青年委員会の組織は大きな部隊を作り上げた。この部隊を六九年闘争に全て投入することになつた。

(2) 六八年、学生の全共闘運動は一挙に全国の大学を巻き込み野火の如く広がつた。ヴェトナム反戦闘争の世界的な広がりと、国内においては六九年安保決戦を念頭に運動が始まつた。関西地区反戦連絡会議、京都、大阪、兵庫の全共闘学生部隊、電通を始めとした官公労の反戦派労働者が大阪中電拠点ストライキへ向けて動き始めた。ブントは「戦旗」紙上において、一斉に「ソヴィエト運動論」を論じ始めた。

全共闘が切り開いた運動を労働者の中へ、労働者一人ひとりが自らの意志で決断し、政治ストライキに突入する。これが六九年一〇月二一日大阪中電マッセンストライキである。果たしてこの歴史的な闘いは何をもたらしたのか。
大阪における六九年一〇・二一闘争が巨大な闘争であったことは間違いない。何よりもその与えた影響の大きさである。中電スト実のストライキ宣言（一〇・三桑畠執筆）とスト突入を頂点に闘いが始まつた。

全関西ストライキ実行委員会は、

一〇・一六 全関西総決起集会（基調報告・福富健、尼崎労働会館）を開催。

一〇・二〇 記者会見を開き「中央権力闘争—中電マッセンストライキ—北大阪制圧」闘争をぶち上げた。

そして一〇・二一当日、扇町公園に約二万人の反戦労働者と学生の部隊が続々と集結した。闘い

に決起した中電スト実に連帶するためである。一年近くに及ぶ拠点ストライキ、大阪中電マッセンストライキの宣伝活動は地域、職場、学園に闘争組織を作り上げていく過程でもあつた。その合い言葉は「中電マッセンストライキ貫徹」であつた。全ての部隊は中電をめざした。実はこの闘いは七・六ブントの内部抗争により、塩見（後の赤軍派議長）たちの強力な部隊が脱落した。中央権力闘争と銘打つた戦術は大打撃を受けた。

また大阪中電内部では電信反戦の大きな部隊と電通労研を組織することができなかつた。それは多大な困難と犠牲を伴うものであつたためでもある。それにもかかわらず中電スト実の衝撃が極めて大きな影響を与えたことも事実である。それは扇町公園に集まつた労働者、学生はもちろんのこと、大阪中電周辺、大阪駅前を埋めつくした群衆の姿の中にも示されている。

そのデモ隊は中電を包囲し突入をめざしたが完全に阻止されてしまった。大阪駅前は密集した数千人の群衆がデモ隊を取り巻き事態の推移を見つめていた。私もトラックの上でデモ隊と群衆に対してアジテーションを行つた。群衆は夜中一二時を過ぎても立ち去らなかつた。何かが起きる、との思いからである。

(3) この闘いはわれわれはもちろんのこと、警察権力、全電通労組いずれもが全国体制の布陣を敷いたのである。

電々公社中央の指揮の下、大阪中央電報局ビルは一〇月に入るとジユラルミンで包囲され、入り

□はベニヤ板の仮木戸が作られて出勤者を検閲していた。

一〇・二一当日、警察権力は他府県の応援の下八千名を動員したと言われていた。そしてその大半は私服警官で対ゲリラ作戦として群衆の中に投入された。この包囲網にわれわれの特殊部隊は全て封じられることになつた。

また北大阪一帯の公衆電話は全て撤去され、「北大阪制圧の特殊戦術」も不発に終わつた。

全電通労組中央本部も近畿地本、大阪中電支部の直接指揮にはいつていた。

社会党・総評は当日、大手前公園で集会を開き、その多くの部隊はデモ行進で夕方の扇町に向かい、反戦派労働者や学生部隊と合流し、一〇・二一扇町集会は予想を上回る大集会となつた。

この闘いは、続く一一・一三扇町闘争で一転して激しい攻防戦となつた。その結果遂に一人の岡大生が死亡という結末を迎えた。

東京では「新宿騒乱」という言葉通りの闘いが激しく燃え上がつた。これは大阪における闘いと共に、日本階級闘争に新たな苦難の時代を告げることになつた。

(4)すでに四十有余年が過ぎた。この闘いは今に至るも多くの傷跡を残している。私はこの闘いに対して、中電スト実を直接指導する立場にあつた。

また一〇・二一闘争に対しては関西ストライキ実行委員会代表の立場にあつた。四年前、北大阪反戦四〇周年記念集会が開催された。

佐渡、嶽山西君を中心とする、かつての北大阪反戦青年委員会の活動家たちが主催して、五〇名くらいが集まつた。皆六〇代、七〇代であつた。

そのメンバーの一人、佐々木君は集会直前に突然に亡くなつたことを集会当日に知らされた。

主催者代表を務めたのは嶽山西君であつた。六九年安保決戦後独立して事業を起こし、警備会社を経営していた。その傍ら佐渡君と共に「マッセンストライキ総括」活動をやり、北大阪反戦青年委員会のメンバーをまとめ上げていた。その彼も二〇一二年八月三日に癌の再発で亡くなつてゐる。癌との壮絶な闘いであつた。彼は最後まで自らの病状を記した報告書を送つてくれた。その強靭な精神力は驚くべきものであつた。

彼らは毎年正月に集まり「マッセンストの思い出」を肴に酒を飲んでいた。私も参加したことがある。一〇・一一闘争では彼らはいずれも中心メンバー。全員が特殊な任務を、最も困難な任務を担つて、当日権力に封じられてしまつた。その悔しさが彼らの心を掴んで放さない。それが共通の絆になつてゐる。それを、四〇年以上も続けてきているのである。その思いの深さと重みは計り知れない。人生そのものを決定付けたと言つても過言ではない。もちろん私自身も例外ではあり得ない。

また今回たまたま前田裕晤氏の本の出版に関わる中で、マッセンストに反対せざるを得なかつた人たちの心の叫びにも触ることができた。彼らの苦しみも、とても重いものであつたことが伝わってきた。なるほど、と頷けるところがあつた。いずれも苦しみ抜いた姿が思い浮かぶ。

また聞くところによると、大阪中電出身で当時全電通中央本部副委員長として異才を放つていた片山甚市はマッセンストライキの関係で委員長になれなかつたと言われている。

その後彼は参議院議員に当選する。私は彼の晩年に、たまたま佐々木君の案内で反戦のメンバー数人と自宅を訪れたことがある。体を患つておられたが、奥さんと共に優しく迎えられた。私に彼が言つてくれたことは、

「立場は違つたが君も本気だつたな」

であつた。言葉は少しばかり不自由であつたが、これが片山甚市という希代の人物だと思つた。時代を彩つた人物の一人である。これも事の一端にすぎない。